

ニッコウヒメハナカミキリの分布について

窪 木 幹 夫*

ニッコウヒメハナカミキリ *Pidonia* (*Pidonia*) *limbaticollis* (Pic) は日光地方から中部地方の東域に分布する *ssp. limbaticollis* (Pic)、中部山岳地域に分布する *ssp. ohbayashii* (Matsushita)、紀伊半島の伯母子岳と四国に分布する *ssp. stephani* Hayashi の三亜種より成る(図1)。

● *ssp. limbaticollis*

★ *ssp. ohbayashii*

▲ *ssp. stephani*

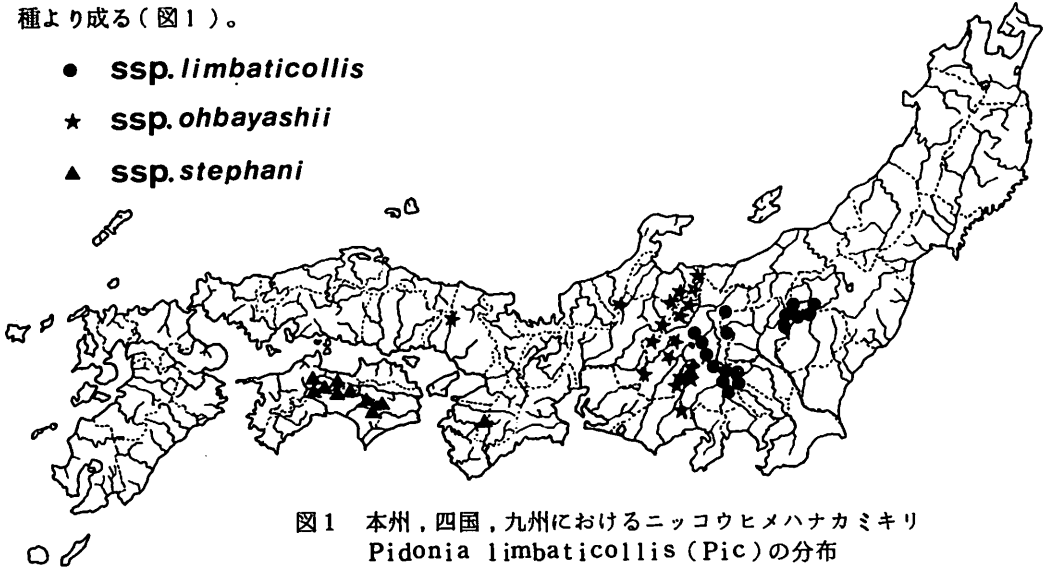


図1 本州、四国、九州におけるニッコウヒメハナカミキリ *Pidonia limbaticollis* (Pic) の分布

亜種 *limbaticollis* は頭部が黒褐色で、前胸部は黄褐色の前後縁を除き黒褐色を呈する。腹面は全体が黄褐色である。長野県美ヶ原、鼻峠、八ヶ岳には頭部や前胸部が赤褐色で上翅の黒色紋が縮小した個体が生息する。このような黒色部の退色傾向は本亜種の分布域の西域に生息する個体ほど顕著である。黒色部の発達が著しい亜種 *ohbayashii* の分布域に近い亜種 *limbaticollis* ほど明るい退色個体が出現する。両亜種は体色に関して漸次変化していくような連続的な変異を示さない。亜種 *ohbayashii* は頭部、前胸部、小楯板が黒色を呈する。腹面は頭部と胸部が黒色、腹部が黄褐色で♂では各節基部が黒色である。このような黒色部の発達は中部山岳地域の個体群に比較的安定している。亜種 *stephani* は 亜種 *ohbayashii* より地理的に離れた原亜種に似るが、脚がより明るく黄褐色で♀の触角がより短く、♀の上翅S紋がより細く、小楯板後方で消失し、Lm紋もより小さく、胸部と腹部の腹面の黒色紋がより発達する点で区別できる。

亜種 *limbaticollis* と *ohbayashii* の分布域はほぼフォッサマグナの糸魚川・静岡線を境にして東西に分かれる。中間地域には本種が生息できるような高い山はほとんどない。ただし、富士山からは両亜種とも採集されていない。一方、中部山岳地域に分布する亜種 *ohbayashii* と紀伊半島や四国に分布する亜種 *stephani* との分布域は互いに離れており、中間地域でのニッコウヒメきべりはむし Vol.11, No.1, 1983.

ハナカミキリの記録はなかった。浦田・水野(1982)は紀伊半島の伯母子岳から本種を初記録し、この個体が四国亜種に該当すると指摘した。筆者は遠山雅夫氏の御厚意により兵庫県産のニッコウヒメハナカミキリを調べる機会を得たので、その結果を報告する。

Pidonia (*Pidonia*) *limbaticollis* ssp. *ohbayashii* (Matsushita)

ニッコウヒメハナカミキリ

♂、兵庫県宍粟郡波賀町音水(標高約650 m)、21. V. 1972. 高橋寿郎採集。

この個体は写真に示したように典型的な亜種 *ohbayashii* であり(図2)、中部山岳地域の個体と外見的に区別できなかった。この記録により、中国地方の東部には従来中部山岳地域特産と考えられてきた亜種 *ohbayashii* が生息することが明らかになった。本亜種は中部山岳地域では6月下旬から8月中旬にかけて、中山帯から亜高山帯に出現するが、標高1,000 mにも満たない音水で、それも5月に採集されたことは今後の分布調査で留意しなければならない点の一つである。一方、紀伊半島の西部から前述のように亜種 *stephani* が記録されているので、中間地域での分布調査が必要である。

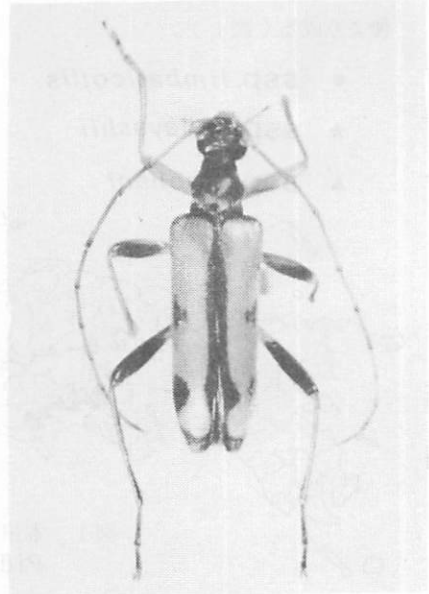


図2 兵庫県音水産ニッコウヒメハナカミキリ♂

窪木ら(1977)と窪木(1980)はニッコウヒ

メハナカミキリ(ニオオバヤシヒメハナカミキリ)がニシキウツギの花に好んで集まることを指摘している。ニシキウツギは山地に生える落葉低木で葉腋に白色～紅色に変化する長さ約8 cmの筒形花を2～3個つける。花は横向きからやや下向きに咲き、ニッコウヒメハナカミキリの成虫は、筒形の花の中に頭から入りこみ花蜜を食べたり、頭を外側に向け花粉を食べたりしている。また、花の中で交尾している雌雄もしばしば観察される。ニシキウツギは東北地方の阿武隈山地～日光山塊～中部地方、四国、九州のほか、紀伊半島や中国山地にも点々と分布している。ニッコウヒメハナカミキリが採集されていない地域でもニシキウツギの開花期をポイントに調査すれば本種を採集することが可能であろう。

巨視的にみて、ニッコウヒメハナカミキリは中部山岳地域に体色の最も黒い亜種 *ohbayashii* が生息し、これに隣接してより体色の明るい亜種 *limbaticollis* が東側に、亜種 *stephani* が西側に生息することになる。未発表であるが、九州には亜種 *stephani* よりさらに体色の明るい個体が採集されているので、これらを含め日本列島でのニッコウヒメハナカミキリの分化の歴史を検討する必要がある。

末筆ながら、貴重な標本を心よく譲られ、発表の許可を下された高橋寿郎氏とニッコウヒメハナカ

ミキリの採集記録に関する情報をいただいた鈴木和利氏にお礼申しあげる。

引用文献

窪木幹夫・柴田孝尚・田中直(1977)

群馬県・仁加又沢におけるヒメハナカミキリの生態調査—特にその垂直分布と訪花性について—
New Entomol. 26(1・2):15-24

窪木幹夫(1980)

カミキリムシ科ヒメハナカミキリ属の訪花性。日生態会誌, 30(2):133-143

浦田和義・水野弘造(1982)

紀伊半島よりプロイニングヒメハナカミキリ。月刊むし, (135):29-30

* 東京都世田谷区大原1丁目47-15

神戸・明石近海地域の主な蛾(その1)

松本健嗣*

神戸・明石方面のトベラ、カクレミノ、ヒメユズリハ、ウバメガシ、オニヤブマオ等海岸地方で多く見かける植物の自生している地域の蛾について少し詳しく調べ度いと思っている。小生永年この地域に住んでいながらまだ徹底した採集調査は試みていない。本格的調査はこれからの課題なのであるが取敢えず予告篇のつもりで本誌紙面をお借りしこれ迄の採集品中から主な種を選んで報告する次第である。また理科作品展で見た学童の採品も併せて公表させて頂く。採集者名は一応省略する。

ヘーネアオハガタヨトウはじめ従来の図鑑等に産地の一つとして神戸の名が記されている例は大方1947年迄の旧神戸市すなわちこの域内で得られたものによるのであろう。確かにこの方面には布引、太山寺裏山等見事な暖帯樹林が残されている場所があるが地形は急峻で、地質は風化し易い酸性火成岩であり表層の腐植土の発達は左程芳しくはない。位置が日本列島の中央部であることも蛾類の実態がかなり解明された現在ではやゝ魅力に乏しい嫌いがある。土地柄遠隔の原産地からやって来た種に遭遇する機会も多いと思はれるし専ら植栽された植物でのみ繁殖している種もかなりあるだろう。尚今迄調査の拠点であった拙宅周囲の環境についても触れて置く必要があると思うが、それは花岡岩々盤が露出した谷川のほとりの瘠悪地で言うに足りないお粗末な場所である。それに今では周囲に家が建てこんでしまった。

* 神戸市長田区花山町2丁目14-6